

学校園教育推進サポート事業 報告書

学 番	1408	学校名	亀田小学校	校長名	平山 誠	作成者名	山田 やしほ
学校教育推進サポート担当者名			教務主任	山田 やしほ	電 話	025-381-6124	

1 実践のテーマ

学校の教育ビジョン具現に向けたカリキュラム・マネジメント
～「総合的な学習の時間」の新単元「夢中」の創設～

2 テーマ設定の理由

当校の児童は、概して素直であり、決められたことはやろうとする。しかし、その一方で、経験したことのない新たな活動に挑戦したり、自分の思いや考えを人に伝えたりすることに弱さと苦手意識を抱えている。

昨年度、教育目標を「まっすぐ伸びる」から「未来を拓く」へと変えた。20年ぶりの改定である。全員が一つのゴールに向かってまっすぐ進んでいく教育から、自ら選んだ道を力強く切り拓いていく教育へと転換するためである。児童が生きていく未来社会は、これまでの社会の延長線上にはないからである。

この新教育目標の下、「挑む」「伝える」「高め合う」という三つの重点目標（資質・能力）を設定し、この教育ビジョン具現に向けて全ての教育活動を推進してきた。校務分掌には「三亀プロジェクト（学部・結部・遊部）」という三つの重点目標達成のためのプロジェクトを位置付け、創意ある教育活動を展開している。

今年度は、「総合的な学習の時間」の再編によって、新しい単元「夢中」を創設し、教育ビジョン具現に向けたカリキュラム・マネジメントの核として取り組んだ。児童が自らテーマを決め、解決方法を模索しながら進めることの面白さや楽しさを実感することができた。

次年度は、新単元「夢中」の取組を一步進め、児童がクリエイターとして主体的に興味をもっていることに関わり、解決方法をブラッシュアップすることで成果物をクリエイトしていく姿を目指す。また、教科横断的かつ探究的な学びを目指す新単元「夢中」は、スポーツに例えれば「試合」であり、各教科等は「トレーニング」に当たる。この両者を往還させた学びによって、児童に「挑む」「伝える」「高め合う」の三つの資質・能力を育成し、力強く「未来を拓く」児童の育成を目指したい。

3 実践内容

「挑む」「伝える」「高め合う」の三つの資質・能力を育成するため、「総合的な学習の時間」の新単元「夢中」を次のような構想で計画・実践する。

- (1) 3年生から6年生の縦割りで学習集団を編成する。
- (2) 本単元では、一人一人の児童が自分で決めたテーマに向かって探究的に学び、成果物をクリエイトする。
- (3) クリエイトした成果物（プログラム、プレゼンテーション、ムービー、テキスト、デザイン・アート、アニメーション、ミュージック等）を完成させることを本単元のゴールとする。学びのキーワードは「コンテンツの消費からコンテンツの生産へ」である。
- (4) 3年生以上の学級担任がジェネレーター（共に活動する役割）となって指導に当たる。
- (5) 地域人材を含む外部人材を可能な限り積極的に活用する。

4 実践計画

実施時期	実施内容（研修会、先進校視察、授業公開 等）	
	教 師	児 童
4月	単元「夢中」の構想検討と計画立案	「学び」のゴール認識とテーマ探し
5月	児童へのオリエンテーション	
6月	児童の自己テーマ仮決定	

7・8・9月	先進校視察 講師を招聘した校内研修（探究的な学び・ICTを使った多様な表現） 単元計画の確認と修正・授業実践	テーマと表現方法の決定と自主学習 テーマと表現方法の決定と自主学習 テーマと表現方法の決定と自主学習
10・11月	授業実践・授業公開・研究発表会	成果物完成に向けたクリエイト活動
12・1・2月	成果と課題の整理・次年度に向けた単元	成果物完成に向けたクリエイト活動成果
1・2月	計画修正	物発表会
3月		

5 成果

(1) 成果物を生み出すために「夢中」になってクリエイトする児童の姿

学校評価における「夢中の学習に継続的に取り組んでいるか」の質問に対して、児童の肯定的評価が前期89.0%、後期は93.8%であった。前期から4.8%増加し、児童の取組の向上が見られた。向上した理由として、夢中を2回行ったことと視点を広げるための手立てを講じたことが挙げられる。

今年度初めは上記表のように計画していたが、子どもたちの様子から夢中の学習を前期と後期の2期に分けて行うこととした。「テーマ探し」→「テーマと表現方法の決定」→「成果物完成に向けたクリエイト活動」→「発表」→「振り返り」を1セットとして考え、前期と後期にそれぞれのサイクルで行った。昨年度から「夢中」に取り組んできた成果により、活動がスタートする前からすでにテーマを決め、取組を進める児童の姿が多く見られた。



【前期】夢中発表会の様子

また、11月には創作活動に取り組む地域の方を講師としてお招きし、「大人の夢中発表会」を実施した。講師の皆さんの作品やお話から刺激を受け、折り紙や動画作成などより幅広い視点で、面白さや楽しさを実感しながら自分の夢中を探究しようとする児童の姿が多く見られた。



【後期】大人の夢中発表会

(2) 「夢中」に対する職員の意識の高まり

学校評価における「夢中の学習に継続的に取り組むよう働きかけたか」の質問に対して、職員の肯定的評価が前期92.4%、後期は100%であり、7.6%肯定的評価が増加した。肯定的評価が増えたのは、職員で問題意識を共有して試行錯誤を重ねて取り組めたことと、先進校から学ぶ機会を職員研修で設けたことが理由であると考えられる。

前期の「夢中」の学習を終え、「児童がどんな姿になればいいのか」「協働の場が必要なのではないのか」「ゴールをどう設定するか」・・・など、職員の中に様々な疑問や問題意識が生まれた。そこで職員研修で考えを出し合い何が大切なのかを共有する場を設けた。その結果、後期は「ゴールとして保護者に参観してもらう夢中フェスを設定する」「協働の場が自然と生まれるよう、テーマと学年が異なる集団を組織する」ことを共有し取組を進めた。しかしまだ「本当にこれでいいのか」という問題意識が残っていた。そこで天童市立天童中部小学校から講師を招き、「夢中」創出のヒントとなるFST8（フリースタイルプロジェクト）の講義を受けた。その中で、テーマ設定や一人一人の必要感、場所や方法を自己決定させることの重要性を学んだ。公開授業も3回行い、校外の方々から参観していただいた。実際に「夢中」に取り組む児童の姿を基に、成果や課題を共有することができた。また当校の職員が天童中部小学校へ視察に行き、子どもの活動の様子を参観した。実際に目の当たりにした子どもの生き生きとした姿を全職員で共有することができた。以上のように、職員が、悩む、話し合う、学ぶ、実践することを繰り返すことで、活動をブラッシュアップさせようとする姿が、「夢中」に対する意識の高まりであった。

次年度は、文科省の「教育課程柔軟化サキドリ研究校事業」の指定を受け、「夢中」を教科化していきたい。様々な教科を複合的に組合せ現在の15時間を35時間にする。児童が自分の好きや得意に向かい、試行錯誤しながら没頭できる時間を確保し取り組むことで、自ら課題を見つけ、解決していく楽しさを実感させたい。